

読解とその教え方を考える

石黒 圭

1. 7段階からなる読解活動

文章を理解すること、すなわち、読解とは、いったいどのような言語活動だろうか。

素朴に考えると、目に入る文字列を意味に変換する活動だということになる。しかし、よく観察してみると、読解という活動には段階性があることがわかる。ここでは、それを、以下の①から⑦までの7段階に分けて考えることにする。

- ①画像取得活動：文字列を眺める
- ②文字認識活動：1文字ずつ確認する
- ③語句分節活動：文字列を語に区切る
- ④意味変換活動：語の意味を理解する
- ⑤統語解析活動：文の組み立てを考える
- ⑥文脈構成活動：前後の文脈を意識する
- ⑦状況想像活動：イメージを想像する

もちろん、この7段階は①→②→…→⑦の順に進行するとは限らない。並行して進行することも、部分的には逆順で進行することもある。しかし、読解という活動を、このように段階性のある活動としてとらえると、私たちが頭のなかで何を行っているか、また、私たちが教室で何を教えたらよいかの方がより明確になる。

以降では、この七つの段階を一つ一つ詳しく説明すると同時に、それぞれの段階で考えられる教育活動を紹介することをおして、日本語教育の読解の授業をより豊かなものにするヒントを提供したいと考えている。

なお、本稿は、私自身の教育実践を紹介することを目的としており、その一部は石黒(2010a)、石黒編(2011)に基づくものである。ほかにも、そうした教育実践の取り組みは多数あるが、本稿の目的に鑑み、詳細は、国際交流基金(2006)に譲ることにしたい。

2. 画像取得活動

まず、「①画像取得活動：文字列を眺める」から考えよう。

読解活動の第一段階は、文字列を眺めるところから始まる。横書きであれば、左から右へ、また上から下へ、縦書きであれば、上から下へ、また右から左へ、視線を走らせて文字を脳内に取りこんでいくことになる。

画像取得活動自体は、当該の言語に通じていなくてもできる。たとえば、私はタイ語の文字がまったく読めないが、タイ語の文字を眺めて頭に取りこむことはできる。その意味で、人はスキヤナのような能力を持っていると考えられる。

しかし、当該の言語に通じていないと、紙面に印刷された文字を適切な順序とスピードで見ることができないだろうし、意味を媒介にできないため、見慣れない文字を記憶に保持することも難しくなるだろう。

画像取得活動は、言語能力と直結しない活動であるため、日本語教育の授業のなかで、この段階での授業活動を構想することは難しい。ただし、速読法において、眼球運動を速くしたり、視野を拡大したりするトレーニングは存在する。そうしたトレーニングは、汎言語的なトレーニングであると考えられる。

3. 文字認識活動

つぎに、「②文字認識活動：1文字ずつ確認する」を考えたい。

この段階では、画像として脳内に取りこまれた文字を、文字として認識することになる。「①画像取得活動」をスキヤナの働きと考えると、「②文字認識活動」はOCRソフトの働きに相当する。OCRソフトは、スキヤナで取りこんだ画像を文字列に変換するソフトである。文字列に変換して初めて、私たちはそれを文章として理解する準備が整うのである。

先ほど述べた私自身のタイ語のように、人は、知らない文字に出会うと、思考が停止して読解活動が進まなくなる。日本語の場合は、平仮名・片仮名・漢字の知識が必要で、この三つの文字を知らないと、大人むけに書かれた日本語の文章の読解は不可能である。

そのなかでも、とくにやっかいなのは言うまでもなく漢字である。漢字は字数も多く、字体も複雑である。しかし、漢字は表意（表語）文字であるため、知らない漢字でも、ある程度意味を想像することができる。もちろん、正確を期すためには辞書の使用が不可欠であるが、字面から連想する訓練をしておく、意味の推測や記憶に役に立つ。

以下に示すのは、「すし屋の湯呑み」という活動である。

すし屋の湯呑みには「鰯」「鯉」「鰈」「鱒」といった魚編の漢字が並んでいることがある。これらは魚の名前を示しており、あまり見慣れない漢字ではあるが、どんな魚を指しているか、何となく想像することができる。

イワシは陸に揚げるとすぐに弱ってしまうから「鰯」、カツオは身が堅くかつお節にもなることから「鯉」、カレイはその姿が葉のように薄いことから「鰈」、タラはその身が雪のように白く冬が旬であることから「鱒」という漢字が当てられている。もちろん、こうした説明には俗説も含まれるだろうが、それが記憶の足しになるのなら、民間語源の活用もあながち悪くはないのでは

ないか。以下の教室活動①は、初・中級むけの課題例である。

教室活動①「すし屋の湯呑み」

問1 以下の語について、どうしてその字がその意味になるのか、字形から説明しなさい。

明るい	暗い	忙しい	忘れる	晴れる
競う	幸せ	畑	薬	親

漢字は、字形としての側面だけでなく、音声としての側面も持っている。すでに述べたように、漢字は表意（表語）文字であるため、音にできなくても字形から意味がわかることが多い。しかし、音が意味の記憶を支えていることもまた事実であり、音読もまた、重要な文字認識活動である。

たとえば、「東大通りに出店が並んでいる」の「東大通り」を「とうだいどおり」、「出店」を「しゅってん」と読んでしまうと、誤解が生じてしまう。「ひがしおおどおり」「でみせ」と読んで初めて正確に意味が通るのである。

ほかにも、「貸借対照表」を「たいしゃくたいしょうひょう」ではなく、「ちんしゃくたいしょうひょう」と読んでしまっている場合「貸借」と「賃借」を混同してしまっている可能性が高いと見ることができる。

以下に示すのは「音読の効用」という活動である。問題文を試しに音読していただきたい。

教室活動②「音読の効用」

問2 以下の文章を音読し、2通りの読みが可能な漢字について、読み方によってどのような意味の違いが感じられるか、考えなさい。

師走に入って残業が増え、日々の生活がとたんに忙しくなった。それにつれて心も荒みはじめ、立てなおす術を失っていった。そんなある日、西の空をふと見やると、富士山が夕日に栄え、美しい姿を見せていた。それを眺めているうちに、汚れた心も清められ、来る新年も清々しい気持ちで迎えられそうな気がしてきた。

(石黒(2010a)より)

「師走」は「しわす」、「忙しく」は「せわしく」、「荒み」は「すさみ」、「術」は「すべ」、「栄え」は「はえ」、「美しい」は「うるわしい」、「汚れた」は「けがれた」、「来る」は「きたる」、「清々しい」は「すがすがしい」とそれぞれ読む。上記の文章は、日本語母語話者むけのものなので、かなり難しいが、漢字の読みが意味の理解につながることを実感していただけたかと思う。

4. 語句分節活動

第三に、「③語句分節活動：文字列を語に区切る」を取りあげる。語句分節活動とは、認識された文字を、語、あるいは語と語の組み合わせからなる句として認識する活動のことである。日本語の文章では、実質語＋機能語という句のまとまりが「漢字／片仮名＋平仮名」で示されることが多く、分かち書きがなくてもさほど読みにくくならない。

しかし、現実の日本語の文章は、漢字や平仮名が続くことも多く、語のまとまりがわかりにくい場合も少なくない。そのため、長い文字列から句を切り出す練習が必要になる。

教室活動③「語のまとまりに分ける」

問3 (例)を参考に、つぎの文章中の(1)～(4)を、それぞれ語のまとまりに分け、スラッシュ(／)で区切りなさい。

(例) きのうスーパーで私が買った品物はヨーグルトと野菜だ。

☞きのう／スーパーで／私が／買った／品物は／ヨーグルトと／野菜だ。

(1)地球温暖化の主要な原因は、人為起源の温室効果ガスの増加であるという証拠は十分なのか。

(2)世界平均気温を変化させる要因には、温室効果ガスの排出等の人為要因だけではなく、太陽活動、火山噴火によって排出されるエアロゾル等の自然要因も含まれ、これらさまざまな要因が組み合わさって気温の上昇や低下がもたらされます。(3)20世紀中頃には、大気中の温室効果ガス濃度が増加していたにもかかわらず、ほかの要因との相殺で世界平均気温が横ばいとなった時期がありました。(4)IPCC第4次評価報告書では、1906年から2005年の気候のシミュレーションを行った結果、人為的な温室効果ガスの増加を考慮しないと、最近数十年に観測された急激な地球温暖化を再現できないとしており、20世紀半ば以降に観測された世界平均気温の上昇のほとんどは、人為起源の温室効果ガスの観測された増加によってもたらされた可能性が非常に高いとしています。

(『環境白書 平成22年版—循環型社会白書/生物多様性白書』日経印刷より、問題については石黒編(2011)を参照)

紙幅の都合で解答は割愛するが(石黒編(2011)参照)、身近な文章でかまわないので、こうした句を切り出すトレーニングを繰り返せば、日本語の文章で意味を正確に取れるようになる下地が、学習者の頭のなかに少しずつできてくるだろう。

5. 意味変換活動

「③語句分節活動」で文字列に埋もれている語を的確に取りだせるようになったら、「④意味変換活動：語の意味を理解する」の段階に移る。この段階では、語の連続として認識した文字列を意味に変換することになる。そこで活躍するのは、脳内の辞書である。

脳内の辞書は、国語辞典とは異なり、五十音順に語が整然と並んでいるわけではない。もちろん、話し言葉でいえば音声、書き言葉でいえば字形が関係しているが、同時に語の意味も関係しており、意味が関連する語は互いを呼びだしやすいシステムになっていると考えられている。

たとえば、「ホイップバター」「オレンジマーマレード」という語が出てきた場合、「パン」や「朝食」といった関連する話題のなかで出てくるほうが、そうでない場合よりも、より正確かつ迅速にその意味を呼びだせる。つまり、脳内の辞書が効率よく働くためには、その文章の話題を知ることが大切なのである。そこで、以下の「話題を見抜け」という活動が有効になる。

教室活動④「話題を見抜け」

問4 つぎの文章の話題が何か、考えなさい。

一見すると止まっているように見えるが、よく見るといつも動いていて止まることがない。ゆっくりと動いているのだ。夜寝るまえに、かならず頭のそばに置いておく。いつもは静かだが、朝起きるとうるさい。たたくと静かになる。大きいものと小さいものがあり、小さいものは持ち運ぶのに便利である。私はふだんポケットに入れておき、必要なときに取りだして見るようにしている。

(石黒(2010a)より)

おわかりになったかと思うが、答えは「時計」である。

このように文章全体の話題がわかると、文章の理解が迅速かつ正確になり、同時に記憶への定着がよくなる。そこで、漢字で書かれた一つ一つの実質語を意味に変換していく場合、その精度を向上させようと思えば、文脈との整合性をつねに考える習慣をつけさせることが重要になる。その意味で、つぎの「誤変換を探せ」という活動は、作文の授業における校正の練習になるだけでなく、読解のトレーニングにもなる可能性がある。

教室活動⑤「誤変換を探せ」

問5 つぎの文章には、誤った変換が9箇所ある。それを探し、正しい表現に直しなさい。

欧米を旅行すると、日本との小さな違いに戸惑うことがある。日本の生活に慣れていると異和感を覚えるが、よく考えてみると、それなりの合理性を備えていることに気づく。

たとえば、固定式シャワー。欧米のホテルでは、壁の高い市に固定式シャワーが取り付けられていることが多い。ホース式シャワーに慣れていると、ホースではなく自分の身体を動かさねばならず、不便を感じる。

しかし、欧米では、浴槽のなかが洗い場なので、固定式シャワーのほうが建って洗えて便利である。浴槽のそとに洗い場があり、椅子に座って洗う日本とは、その点で対比的なのである。また、湯船でお湯に漬からないぶん、欧米ではお湯が勢いよく出るシャワーが好まれる。そう考えると、ホース式シャワーが選ばれない理由もよく理解できる。

それから、レバー式蛇口。欧米では、上げて水を出すタイプのものしか見かけない。欧米のホテルで、水を止めるつもりでレバーを勢いよく上げて悲惨な経験をした人も少なくないだろう。間隔的には不自然なようだが、じつは日本でも、上げて水を出すタイプのものが復旧しつつある。

きっかけは、1995年の阪神淡路大震災であった。地震の影響でレバーが下がって水が出しっぱなしになり、暖水を引き起こす事故が相次いだ。その結果、2000年にJIS（日本工業企画）で欧米式に統一されたのである。

(石黒圭『論文・レポートの基本』日本実業出版社より)

念のため答えを示すと、「異和感」→「違和感」、「市」→「位置」、「建って」→「立って」、「対比的」→「対照的」、「漬からない」→「浸からない」、「間隔的」→「感覚的」、「復旧」→「普及」、「暖水」→「断水」、「日本工業企画」→「日本工業規格」の九つである。

6. 統語解析活動

語の理解が終わったら、いよいよ語の組み合わせによって成り立っている文の理解に入る。第五の段階として、「⑤統語解析活動：文の組み立てを考える」を検討する。統語解析活動は、文法という、語の組み立て規則によって構成されている語列を解析し、意味を見いだす活動である。

初級で文法をしっかり学んできた学習者の場合、中級で本格的に読解練習に入っても、単文レベルではあまり問題は生じない。初級文法の知識で十分に対応できるからである。

しかし、複文レベルでは、学習者が慣れていないため、連体修飾を中心とした長い節の処理に戸惑うことが多い。文法の知識としてはわかっているが、長い節が入れ子型になっている場合、その構造が複雑で、どのように処理してよいかわからなくなるのである。

そのさいに役に立つのが、節を [] に入れ、節を受ける接続助詞や主名詞に ____ を引くという方法である。これができるようになると、複雑な文の構造を学習者自身が簡単に解析できるようになる。とくに、日本語の場合、語順の関係でどこから節が始まるのかがわからない場合が

多いが、[]に入れる作業を習慣化すると、節の開始部が自然と意識できるようになる。

以下の教室活動⑥「文の構造を見抜け」を参考にしていきたい。

教室活動⑥「文の構造を見抜け」

問6 第一段落を参考に、つぎの文章の第二段落以降の各文の構造を、節をくくる [] と、その節を受ける表現を示す ____ を使って明らかにしなさい。

[日本で人気がある] テレビ番組の1つに、「大食い番組」がある。大食い自慢のタレントが、[[一定の時間内にどのぐらい多くの料理が食べられるか]を競争したり、[[ある店のメニューに載っている] 料理を全部食べるという] 目標を達成したりするという] ものだ。[タレントたちが [[お客さんがよく頼む] その店の人気のメニューを当てる] まで食べ続けなければならないという] 企画もある。

「大食い」タレントたちはその見事な食べ方で視聴者たちを驚かせ、楽しませてくれる。しかしその一方で、番組にはさまざまな批判の声も寄せられているようだ。

たとえば、あんなに食べて大丈夫なのかと大食いタレントたちの身体を心配する声や、子どもたちが真似をしたらどうするのかという声もある。また、ある雑誌の取材で、A大学で社会学を教えるB教授は、貧しくて十分な食事ができない人や病気で食べられない人のことを考えず、食べ物を無駄にしている若者が増えているとして、こうした番組の影響を指摘していた。

一方、こうした批判の声に対して、貧しさや病気で食べられない人の問題と「大食い番組」とはまったく関係がない、結びつけて批判するのは間違っている、見たくなければチャンネルを変えればよいといった反論もあるようだ。

どの意見にもなるほどと思えるところがあり、「大食い番組」がいいか悪いかを簡単に決めることはできない。しかし、「大食い番組」の人気一方で、ダイエット食品が飛ぶように売れ、ときには若い女性がダイエット食品に頼りすぎた結果、栄養失調になってしまったという問題を耳にしたりすると、現代の「食」のあり方について、疑問を持たざるを得ない。

(石黒編(2011)より)

7. 文脈構成活動

第六は「⑥文脈構成活動：前後の文脈を意識する」、すなわち、多数の文からなる文章として存在している文列に、文脈という意味の連続性を見出す活動である。

文章が線条的な構造である以上、先行文脈との関係、後続文脈との関係という二つがありうる。

先行文脈との関係でいうと、話題の連続性を保証する文脈指示の指示詞が重要になる。日本語の場合、文脈指示の指示詞には、ソ系の指示詞とコ系の指示詞があり、先行文脈の表現や内容を

そのまま持ちこむ場合にソ系が、書き手が自分の考えに引きつけて指示する場合にコ系が、それぞれ用いられる。なお、ア系の指示詞は過去に取得した経験など、記憶を指すときに用いられ、文脈指示として使われることはない。

教科書やシラバスにもよるが、現場指示の指示詞は、コ系、ア系、ソ系とも、初級の早い段階で導入されるのにたいし、文脈指示の指示詞について、あらためてきちんと教えられることは少ない。そこで、文脈指示用法は読解の授業のなかで積極的に教える必要がある。そのさい、以下に示した「指示詞は何を指しているのか」という活動のように、一つ一つの指示詞が何を指しているのかを集中的に訓練すると定着が速い。

教室活動⑦「指示詞は何を指しているのか」

問7 つぎの文章に含まれている指示詞（「それ」「そう」など）が何を指しているか、一つ一つ指摘しなさい。

知るということは、本質としての自分も変わるということです。①それを大げさに表現するなら、自分が別人になる。若い世代には、②その感覚がまったく消えたということでしょう。自分という確固とした実在があって、③それに知識が積み重なっていく。④それはコンピュータの中にデータが蓄積されるのに等しい。いまの若者は、暗黙のうちに⑤そう思っているんだなと思いました。若者が⑥そうなったのは、むしろ大人の「常識」が⑦そうなったからです。

私にとって大学がおかしくなったように思えた理由の一つは、⑧それではないかと思ひあたりました。習うほうの学生が、自分が変わっていくとは思っていない。⑨それでは教育になりません。育つというのは変わるということじゃないですか。教育の「育」は「育つ」ですよ。⑩それを、コンピュータの容量が増えると思っているんじゃないんですか。⑪それでは「育たない」。⑫そこが非常に問題だということに気がついて、以来いままで七年間、なぜ⑬そうなるかをさらに考えてきました。

(養老孟司『養老孟司の<逆さメガネ>』PHP新書より)

また、先行文脈との関係で、話題の連続性を保証するのは、文脈指示の指示詞だけではない。日本語という言語は一般に文脈依存性が高く、言わなくても済むものはわざわざ言わないという傾向がある。その意味で、指示詞よりもむしろ省略が無標であるともいえる。文脈指示の指示詞と同様に、省略もまた明示的に教えられることが少ない。そのため、省略も読解の授業のなかで積極的に扱っていく必要があるだろう。

教室活動⑧「省略の復元」

問8 つぎの文章を読み、そのあとの質問に答えなさい。

東京のお台場*に現れた巨大ロボットを見に行った。⁽¹⁾ 有名なアニメに出ていたロボットで、今回あるプロジェクトの1つとして作られた模型だそうだ。

⁽²⁾ 全長18メートル。実物大だという。 ⁽³⁾ 近くで見ると、まず大きさに驚かされる。 アニメで主人公がこんなに大きなロボットを操縦していたのかと思うと、驚きはいつそう増す。子どもころ作って喜んでいたプラモデルも、実物大にはかなわない。そのころに見られたら、どんなに感動しただろう。

このロボットは、ただ立っているだけではない。⁽⁴⁾ 30分ごとに動くのだ。 頭が左右に動いたり、体のあちらこちらから光や霧を発射したりする。そのたびに会場から「お～」という歓声が上っていた。⁽⁵⁾ また、近くで見ただけなら自由にどこからでも見られるが、足元まで行って触ることができるコースもある。 ⁽⁶⁾ 無料だということもあって、長い列ができていた。

夜になってもにぎわいは変わらず、むしろ、人の数は増えているようだった。夜に見る姿もまた迫力がある。あちこちでその姿を撮るフラッシュが光っていた。私も、気がつくやうに夢中になってシャッターを押していた。

会場でひととき印象的だったのは、スーツ姿のサラリーマンや大学生風の若者はもちろん、小学校高学年くらいのグループから初老の紳士に至るまで、幅広い年齢層の人たちが、ロボットに熱い視線を注いでいたことだ。⁽⁷⁾ きっと、このアニメのヒーローに自分自身を重ねていたのだろう。 このアニメが現在でもいかに多くの人に支持されているかを実感したひとときだった。

*お台場＝東京湾のそばにある観光地。公園、温泉、テレビ局などがあるデートの場所として有名。

質問1 [] に共通して入る言葉を考えなさい。

- (1) [] は有名なアニメに出ていたロボットで、今回あるプロジェクトの1つとして作られた模型だそうだ。
- (2) [] は全長18メートル。実物大だという。
- (3) [] を近くで見ると、まず [] の大きさに驚かされる。
- (4) [] は30分ごとに動くのだ。
- (5) [] を近くで見ただけなら待たなくてもいいが、 [] の足元まで行って [] に触ることができるコースもある。

質問2 (6) と (7) の [] に合う言葉を考えて入れなさい。

- (6) [] は無料だということもあって、長い列ができていた。
(7) [] はきっと、このアニメのヒーローに自分自身を重ねていたのだらう。

(石黒編(2011)より)

先行文脈との関係で、話題の連続性を保証する第三のものは、反復・換言である。反復や換言によって表されるキーワードのネットワークを見抜くこともまた、読解力向上のために欠かせない力である。

文章の中心的なテーマを示すキーワードは

- ①その文章に高い頻度で出現する。
- ②その文章全体にまんべんなく出現する。
- ③文章の冒頭や結末に出現しやすい。
- ④関連語に言い換えられる傾向がある。

といった特徴がある。

教室活動⑨「キーワードの連鎖」

問9 つぎの文章のテーマを表すキーワードを探し、そのキーワード、およびキーワードに関連する意味を持つ語に下線を引きなさい。

私が中学生時代に、同級生の女の子が、リンスを使い始めた。私たちの世代の男にとって、リンスの匂いが、女の子の匂いであり、初恋の記憶である。日本でリンスが一般化したのは、昭和四十年代ではあるまいか。

初恋に限らず恋愛は匂いと無縁ではない。近しい関係になれば、自然とお互いが、自分の匂いを相手に知られてもいい距離になるのである。

最近、ネット上のみでの恋愛もある。匂いのない恋愛である。体臭のようなものを感じることもない恋愛は、私には頼りないもののように思える。

私たちが子供の頃は、便所は汲み取り式だった。便所は「臭くて当然の場所」だった。だが、今では、「臭くてたまらない場所」は家庭のどこにもないのだ。今、匂いは家庭から、どんどん消えつつある。つまり、生活の中で、匂いの占める割合がどんどん減っている。とするなら、恋愛の中に匂いが入り込まなくてもよくなっていくのだろうか。

(竹内一郎『人は見た目が9割』新潮新書より)

キーワードは「匂い」であり、「体臭」や「臭い」といった関連語に置き換えられている様子が

見てとれる。

なお、先行文脈との関係という点では、接続詞も問題になるだろうが、紙幅の都合でここでは扱わない。接続詞を読解の授業に生かすヒントについては、石黒(2008)を参照されたい。

さて、ここまで、指示詞、省略、反復・換言と、今読んで問題にしている文と先行文脈との関係について考えてきた。ここからは、後続文脈との関係について考えてみたい。

今読んでいる文がそのあとどのように展開していくのかを探る研究は、予測研究として知られている。

もちろん、予測といっても、今読んでいる文の内容から、つぎに来る文の内容が正確に理解できるわけではない。もし正確にわかるような内容しか書かれていないのなら、そもそも読む必要はなくなってしまふ。

だからといって、つぎに来る文の内容がまったく想像できないとしたら、文が変わるごとに、読者はゼロからその文を理解しなければならないことになり、理解の負担は大きく、実用に耐えうるような速さで文章を理解することはできなくなってしまうだろう。

読解の授業において、学習者に予測の実感を持ってもらうさいには、私自身は、ユーモアのある文章を用いることにしている。たとえば、つぎのようなものである。

教室活動⑩「予測で笑おう」

問 10 つぎの文章を読むなかで、次に来る内容の見当がついたものの、実際には予測が外れてしまった文の番号を挙げなさい。

(1)わたしの職業はダンス教師で、タレントの女の子たちにダンスを教えている、と言うと、たいていの男性に羨ましがられる。(2)しかし、実態は、そんなに羨ましがられるようなものではない。(3)第一に、銀行員と同じで、価値のあるものを扱っているからといってそれを手に入れたり、自由にすることができるわけではない。(4)第二に、価値のあるものを扱っているのかどうかかなり疑問がある。(5)第三にわたしの職業はダンス教師ではない。

(6)ほんとうをいうと、私は女子大で哲学を教えている。(7)そのかわり趣味でジャズをたしなみ、義務で税金を払い、その片手間に新聞を読んだりテレビを観たりしている。(8)残りのわずかな時間は研究にあてている。

(9)女子大だと言うとよく羨ましがられるが、実際には決してそんなによいものではない。(10)理由は大きく分けて五つあるが、そのうち二つはさしきわりがあってここに書くことはできない。(11)あと二つは思いだせず、残りの一つは今、鋭意究明しているところである。

(12)バレンタイン・デーのときなど、お前ならトラック一杯くらいもらうだろう、とよくいわれるが、実際には単位が足りそうにない学生がレポートに二百円くらいのチョコレートをつ

けて郵送してくる、というのが数年に一度ある程度である。(13)わたしがチョコレートをもたらわないのは、わたしには隠れファンしかおらず、ストレートに気持ちを表現できる学生がいないためである。

(土屋賢二『われ笑う、ゆえにわれあり』文藝春秋より)

予測についてはさまざまなタイプがあり、そのタイプによってトレーニング法は異なる。詳細は石黒(2010b)に譲ることにして、ここではとくに重要な点、すなわち、文章の全体構造と予測との関係について示しておきたい。

予測自体は、文章を読んでいる過程ですべての文で起きているわけではない。文章の流れの転換点となるような文で意識されるものである。

教室活動⑩「予測を意識する文」

問 11 つぎの文章を読むなかで、内容に具体性が足りず、次文以降で内容を確認めたくなる文に下線を引きなさい。

たとえば、連休を利用して郊外に足を伸ばす。あるいはもっと遠くの観光地、でなければ墓参りでも良い。とにかく高速道路に乗る。そして、あるタイミングでサービスエリアに停車して、しばしの休憩をはかる。

ここで、私は、ある感慨に打たれる。

その感慨をナマの形で公表するためには、若干の勇気を要する。何様のつもりなのか、と言われた場合に、返す言葉が無いから。

でも、言おう。そうしないと話が先に進まない。

つまり、これから申し上げることは、自分のことを棚に上げて言っているのだということも補足した上で告白するに、私は、サービスエリアに集う人々を眺める度に、げんなりするのである。

「ああ、日本人は、いつからこんなに醜くなったのだろう」

と、クルマからワラワラと降りてくる老若男女を眺めながら、いつもそう思うのだ。

うむ。偉そうな態度だ。

が、仕方がないのだ。だって、連休中のサービスエリアに集散する人々は、なぜなのか、どこからどう見てもファッショナブルなカタチをしていないからだ。

なぜだろう。

今回は、この点について考えてみたい。

つまり、わたくしども日本人が、高速道路のサービスエリアで、傍若無人に振る舞うように

なったのはどうしてなのかということについて。および、われわれにとっての、「外出」「旅行」「クルマ」あるいは「ウチとソト」「家族と恋人」「夢と現実」「生活とスピード」……そういつたあれこれについてだ。

サービスエリアの人垣が、あんまり美しく見えないのは、たぶん、彼らが外面を気にしていないからだ。

何時間かクルマの中で身を縮めていて、しばらくぶりに外に出る時、人々の気持ちは、まだ、「外界」に適応できていない。というよりも観察するに、そもそも外出用の服装を身につけていない向きも多い。部屋着、あるいは、狭い車内で楽に過ごすための寝間着に近い衣服を着てクルマに乗り込んでいる。

しかも、ドアを開けて車外に踏み出す時、乗客はまだ、車内にいた時の、身内同士の、だらしなくつろいだ気分をひきずっている。当然、パブリックな緊張感を抱いていない。さよう。彼らは、人前が出る際の覚悟を持つことなく、スエットの上下にサンダルをつっかけたみたいな姿で、公的な空間の中に漏れ出ているのだ。

のみならず、彼らのうちの半数ほどは、周囲が見えていない。差し迫った尿意が視界を狭めている。だから、おもむろに車道を横断したりもする。通路に駐車する運転手もいる。つまりマナーが守れない。ふだんは折り目正しく暮らしている人々であっても、だ。

周囲に気を配る余裕を持っていないのは、トイレに向かって歩く人々だけではない。

自動販売機に行列する若者たちも、外に出るなり歩行喫煙を始めるオヤジも、車中のゴミを持ち出して歩くご婦人方も、寝起きの髪型で、あるいはスッピンを晒して歩いている。むずかる子供や、降りるなり路上で排泄を始める犬も、マナーに気を配る気配を見せない。いや、無理もない話ではあるのだ。朝から長時間窮屈な姿勢で座っていたわけだから。でも、やっぱり見ているとげんなりする。私は、まっすぐ帰るべきなのかもしれない。高速を逆走してでも。いや、逆走はいけない。ジャージで歩くこと以上に。

同じような人ばかりでも、たとえば、新幹線の車両から降りてくる人々は、もう少し整然としている。

緊張感に欠ける部分はあっても、いくらなんでもフリースの長パンツに丹前を羽織っていたりはしない。デパートの催事場に集結するご婦人たちでさえ、これほどカオスではない。なんというのか、バーゲンにやってくる人々の間には、戦士の黙契みたいな規律がある。乱暴ではあっても一定の約束事は守るといったような。だから、混乱していてもだらしなくはない。だってそれじゃ獲物が獲れないもの。

もうひとつ申し添えるなら、いわゆる「ミニバン」と呼ばれるクルマから降りてくる人々のたたずまいが、ひときわ自墮落であるように見える。ええ。そうです。そういうふうに私の目

には見えます。

偏見？

そうかもしれない。

でも、そう見えるのだから仕方が無い。

いや、ミニバンが悪いのではない。

ミニバンに乗る人々は、多人数でクルマに乗っているケースが多い。

だから、クルマから降りて来る時の排出感が、それだけ濃厚である、と。そういうことかもしれない。

でも、それだけではない。

たぶん、ミニバンは、セダンやクーペといったエクステリア重視のよそ行きのクルマと違って、より「内向き」の思想を宿したクルマで、だから、ミニバンの中の人たちは、セダンから降りてくる人たちに比べて、より「外界」を意識していない。そういう事情があるような気がする。

サービスエリアの駐車場に集うクルマのうちに、ミニバンの比率が目に見えて増えだしたのは、平成にはいつてからのことだ。特に、二十一世紀にはいつてからは、セダンやクーペといった「普通の」(←と、私たち旧世代の人間がそう思っている)クルマの方がむしろ珍しくなっている。

そうなのだ。荷物が一杯積めて、乗り降りが楽で、マルチな利用形態に対応することのできるミニバンがスタンダードになってからこっち、クルマに関する基本的なマナーが、変化した、と、そういうことなのである。善し悪しは別にして。

だから、私のような、古い時代の人間、すなわちクルマに対して身構えていた世代の人間は、部屋着の感覚をそのまま路上に持ち出してしまうミニバン時代のドライバーやナビゲーターの姿に、違和感を禁じ得ない。

「おいおい」と、私は思う。

「パジャマで降りてくるのは、いくらなんでもあんまりなんじゃないのか？」と。

(小田嶋隆の「ア・ピース・オブ・警句」2010年1月25日『家族』マーケティングの栄光と落日」<http://business.nikkeibp.co.jp/article/life/20100122/212372/>より)

この文章は読んでいくうちに引きこまれるような不思議な力がある。そして、そうした力の背後には予測があるように感じられる。

高速道路のサービスエリアに入った筆者は、「ここで、私は、ある感慨に打たれる。」読者は「ある感慨」が何であるのか、知りたい気持ちになる。しかし、筆者はそれをすぐに明かさずに、た

めらうふりをして、しばらく引っ張って盛りあげ、つぎのように切りだす。「つまり、これから申し上げることは、自分のことを棚に上げて言っているのだということを補足した上で告白するに、私は、サービスエリアに集う人々を眺める度に、げんなりするのである。」

読者はここでまた新たな謎に直面する。筆者はなぜ、サービスエリアに集う人々を眺めるたびにげんなりするのか、わからないからである。その理由は、ほどなくつぎのような文で明かされる。「だって、連休中のサービスエリアに集散する人々は、なぜなのか、どこからどう見てもファッショナブルなカタチをしていないからだ。」そして、そこに「なぜだろう。今回は、この点について考えてみたい。」と続けることで、文章全体のテーマについて正式に設定する。

連休中のサービスエリアに集散する人々がファッショナブルなカタチをしていない理由は、「サービスエリアの人垣が、あんまり美しく見えないのは、たぶん、彼らが外面を気にしていないからだ。」という文で比較的すぐに示される。しかし、読者の立場からすると、この文だけではイメージが湧きにくいので、その具体的な描写がほしくなる。そして、そうした読者の予測に答える形で、寝間着のような服装、緊張感に欠ける雰囲気、周囲への配慮やマナーの欠如が順に示されるのである。

また、サービスエリアの人垣の特異性を強調するために、「同じような人ばかりでも、たとえば、新幹線の車両から降りてくる人々は、もう少し整然としている。」「デパートの催事場に集結するご婦人たちでさえ、これほどカオスではない。」という文が示される。この2文でも小さな予測が働いている。

そして、話はミニバンへと移る。「もうひとつ申し添えるなら、いわゆる『ミニバン』と呼ばれるクルマから降りてくる人々のたたずまいが、ひととき自堕落であるように見える。」という文から、読者はなぜミニバンがひととき自堕落に見えるのか、その理由が知りたくなる。

「ミニバンに乗る人々は、多人数でクルマに乗っているケースが多い。」という理由が示されるので、そこに焦点があるのかと思いきや、「でも、それだけではない。」と肩すかしを食わせ、読者に新たな予測を喚起させる。そして、文章全体の要点が、「そうなのだ。荷物が一杯積めて、乗り降りが楽で、マルチな利用形態に対応することのできるミニバンがスタンダードになってからこっち、クルマに関する基本的なマナーが、変化した、と、そういうことなのである。」にあることを示し、そのことを前提に「だから、私のような、古い時代の人間、すなわちクルマに対して身構えていた世代の人間は、部屋着の感覚をそのまま路上に持ち出してしまうミニバン時代のドライバーやナビゲーターの姿に、違和感を禁じ得ない。」とまとめてみせるのである。ここへ至って読者は初めて「ここで、私は、ある感慨に打たれる」理由を、その背景も含めて包括的に理解できるのである。

読者が予測をするということは、読んでいる文章にたいして質問を投げかけ、その質問の解決

を後続文脈に期待するという営みであると考えられる。そして、その質問にたいする解答が与えられた瞬間、それまでの内容が一つのまとまりとして理解され、新たな話題に移る準備が整うのである。

ちなみに、最後の『『おいおい』と、私は思う。『パジャマで降りてくるのは、いくらなんでもあんまりなんじゃないのか?』と。』という終わり方も、「おいおい」で一旦止めることで、予測を利用したタメを作ってオチをつけたところが巧みである。

8. 状況想像活動

文章理解の最後の段階は、「⑦状況想像活動：イメージを想像する」である。文章は、大きくは、五感でとらえられ、映像化できるものと、論理でとらえられ、モデル化できるものに分かれる。

五感でとらえられ、映像化できるものは、絵に描いてみるという活動が考えられる。たとえば、『古今集』に収録されている春道列樹「山川に 風のかけたる しがらみは 流れもあへぬ 紅葉なりけり」を絵に描くと、どうなるだろうか。

解釈をすると、「ある秋の日、山のなかを流れる清流に、風がさーっと吹いてきて、川をせき止める柵のようなものを架けていった。それは、流れることができずに溜まっている、赤く染まったもみじの葉だったのか。」くらいだろうか。この歌を読んだ人は、きっとそうした情景を頭のなかに思い浮かべられるだろうし、巧拙はともかくとして、1枚の絵にすることもできるだろう。

一方、論理でとらえられ、モデル化できるものは、簡潔な言葉を用いて、図や表にしてみることが考えられる。

教室活動⑫「文章構造を図示しよう」

問 12 つぎの文章を読み、自分なりの方法で内容を表にまとめなさい。

アメリカは移民の国であり、伝統よりも合理性を重視する。そのため、ある新しい習慣が合理的だと思ったら、積極的にその習慣を受け入れる柔軟性がある。日本で見られる習慣のいくつかも、アメリカ社会で定着しはじめている。

まず、靴を脱いで部屋に入るという習慣がある。もちろん、アメリカ社会では、土足のまま家に上がり、部屋を歩き回るといった文化が根づいている。そして、一昔前までは靴を脱ぐことは服を脱ぐことと同じくらい恥ずかしいことだという意識があった。

ところが、現在では、玄関のところで靴を脱ぐ家庭も少なくない。そのほうが部屋を清潔に保て、掃除の手間も省けるからである。同時に、靴を脱ぐことでリラックスできるという効用にも気づくようになった。

また、洗濯物を外に干すという習慣も広がりつつある。たしかに、欧米社会では、布団を干

すと景観が台無しになるという考え方が根強く、アメリカもその例外ではない。外干しをするのは貧困層が多かったことから、貧しさの象徴のように考える人も少なくない。

しかし、ムダな電気代を使うより外干しのほうがよい考える人が増えてきているのは事実である。外が晴れていて、空気が乾燥しているのに、わざわざ室内で乾燥機を使うのはエコではないというわけである。州法を変え、外干しの規制を廃止・緩和する地域も増加傾向にある。

一方、アメリカ人の目から見て、非合理的だと思われる習慣はなかなか定着しないようである。

たとえば、トイレ用スリッパがそうである。日本人はトイレを汚いところを考え、そこでスリッパを履かないことに抵抗を感じるが、アメリカ人はトイレはさほど汚いところとは考えず、スリッパをいちいち履きかえることに抵抗を感じるようである。トイレのドアを開けておくというのも、トイレは汚いから閉ざそうという意識はなく、使用中か否かを示す合理的なサインと考えられているので、おそらくは変わらないだろう。

また、家庭内のマイ箸、マイ茶碗の文化も定着しないように思う。家族のあいだであれば、食器は同じ物を使ったほうが合理的だと考えられているからである。ただし、外出時や職場でのマイカップはエコの観点から合理性が認められており、Starbucksのような喫茶店でもそうした習慣は奨励されている。

(石黒圭『スッキリ伝わるビジネス文書』光文社の文章を一部改変)

表にする方法は、人によってさまざまだろうが、たとえば、以下のような方法が考えられる。

	アメリカで定着しつつある日本的習慣		アメリカで定着しない日本的習慣	
習慣の例	室内で靴を脱ぐ	洗濯物を外に干す	トイレのスリッパ トイレのドア閉鎖	マイ箸 マイ茶碗
過去の意識	服を脱ぐのに近い抵抗感がある	景観を悪くし、貧しさを象徴する	トイレは汚くなく、利便性を優先すべきである	家族間では同じ食器が合理的である
現在の意識	清潔でリラックスできる	電気代がかからずエコである		

このような作業をすることによって、文章全体の構成を鳥瞰するというグローバルな見方ができるようになり、筆者の意図という文章の核心に確実に迫れるようになる。

こうした表を作成する作業のさいに重要なのは、この文章にそくしていえば、段落の切れ目と、それぞれの段落の冒頭にある「まず」「ところが」「また」「しかし」「一方」「たとえば」「また」

という接続詞を頼りに、その内容を形態に基づいて把握することである。

9. まとめ

以上、本稿は読解という活動を、目から文字列を取りこみ (①画像取得活動)、文字列を一つ一つの文字として認識し (②文字認識活動)、文字の連続を語というまとまりに区切り (③語句分節活動)、それぞれの語から意味を読みとり (④意味変換活動)、意味を持つ語連続から文の組み立てを考え (⑤統語解析活動)、その文と前後の文脈とのつながりを意識し (⑥文脈構成活動)、そこから得られるイメージを想像する (⑦状況想像活動) という、7段階からなる一連の活動であると規定し、そのうえで、それぞれの段階を鍛えるのに役立つ、実践的なトレーニング法を各段階で提案した。

とくに、長い文章を読みとるという読解活動特有の性格から考えると、⑥文脈構成活動と⑦状況想像活動の二つに多くの時間を割いて教育することが必要になるだろう。

海外の教室で教える場合、日本語の文章を学習者の母語に翻訳し、その内容を押さえることに終始する傾向がある。しかし、それでは真の読解力は身につかない。

読解の授業の目的は、文章の内容を教えることではなく、文章の読み方を教えることにある。日本語を日本語として読むという回路を学習者の頭のなかに作りあげるのに役立つトレーニング法や教育実践を日本語教師がおたがいに紹介し、それらを貴重な社会的財産として共有することで、読解の授業は質的に向上していくものである。本稿がその一助となることを願い、筆を置くことにする。

参考文献

- 石黒圭(2008)『文章は接続詞で決まる』光文社新書
石黒圭(2010a)『「読む」技術—速読・精読・味読の力をつける』光文社新書
石黒圭(2010b)『「予測」で読解に強くなる!』ちくまプリマー新書
石黒圭編、石黒圭、熊田道子、筒井千絵、Olga Pokrovska、山田裕美子(2011)『留学生のための読解トレーニング —読む力がアップする15のポイント—』凡人社
国際交流基金(2006)『国際交流基金日本語教授法シリーズ7 読むことを教える』ひつじ書房